日蓮大聖人御書全集

土木殿御返事（ときどのごへんじ）

（経文符合の事）（きょうもんふごうこと）

新版1298～1299

土木殿御返事（経文符合の事）

文永10年('73) 7月6日　52歳　富木常忍

鵝目二貫、給び候い了わんぬ。太田殿とそれと、二人の御心か。

伊予殿は器量物にて候ぞ。今年留め候い了わんぬ。

御勘気ゆりぬこと、御歎き候べからず候。当世日本国、子細有るべきの由、これを存ず。定めて勘文のごとく候べきか。

たとい、日蓮、死生不定たりといえども、妙法蓮華経の

五字の流布は疑いなきものか。伝教大師は御本意の円宗を日本に弘めんとす。ただし、定・慧は存生にこれを弘め、円戒は死後にこれを顕す。事相たる故に一重の大難これ有るか。

仏の滅後二千二百二十余年、今に寿量品の仏と肝要の五字とは流布せず。当時、果報を論ずれば、恐らくは、伝教・天台にも超え、竜樹・天親にも勝れたるか。

文理無くんば、大慢あにこれに過ぎんや。章安大師、天台を褒めて云わく「天竺の大論すら、なおその類いにあらず。

真旦の人師、何ぞ労わしく語るに及ばん。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ」等云々。日蓮、またまたかくのごとし。竜樹・天親等すら、なおその類いにあらず等云々。これは誇耀にあらず。法相のしからしむるのみ。故に、天台大師、日蓮を指して云わく「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」等云々。伝教大師、当世を恋いて云わく「末法はなはだ近きに有り」等云々。

幸いなるかな、我が身「しばしば擯出せられん」の文に当たること。悦ばしいかな、悦ばしいかな。

諸人(しょにん)の御返事(ごへんじ)にこれを申(もう)す故(ゆえ)に、委細(いさい)は止(と)め了(お)わんぬ。

七月六日(しちがつむいか)

日蓮(にちれん)　花押(かおう)

土木殿御返事(ときどのごへんじ)